

マホルカ＝ムフ 1962年（18分/35mm版）*Machorka-Muff*
撮影／ヴァンデリン・ザハトラ
ストロープ＝ユイレの処女短編。ハインリヒ・ベルの短編「首都日誌」に基づき、西ドイツの首都ベルを舞台に、元ナチの軍人マホルカ＝ムフを通し、戦後の再軍備をユーモラスに風刺する。主演は作家・ジャーナリストのエーリヒ・クービー。



妥協せざる人々 1964・65年（55分/35mm版）*Nicht versöhnt oder Es hilft nur Gewalt, wo Gewalt herrscht*
撮影／ヴァンデリン・ザハトラ
複数の時制が交錯する。ベルの長編小説「九時半の玉突き」を、55分に圧縮再構成。ケルンのある現在時の一日を中心に、三世代にまたがる建築家一族の数奇な歴史を語りながら、戦後の再軍備を掌握し続ける旧ナチ関係者を痛烈に風刺する。



アンナ・マグダレーナ・バッハの日記 1967・68年（93分/35mm版）*Chronik der Anna Magdalena Bach*
撮影／ウーゴ・ピッコネ
出演／グスタフ・レオンハルト、ニコラウス・アルノンクール
10数年の構想を経て実現したストロープ＝ユイレの原点となる野作。バロック期の大作曲家J.S.バッハの後半生を、演奏場面を中心に妻の視点から語る。古楽器演奏の大家グスタフ・レオンハルトが大パッパに扮し、見事な演奏を披露する。



花婿、女優、そしてヒモ 1968年（23分/35mm版）*Der Bräutigam, die Komödiantin und der Zuhälter*
撮影／クラウス・シリング
オーストリアの劇作家フェルディナント・ブルックナーの三幕戯曲「青春の病」を約10分に圧縮したミュンヘンでのストロープ演出の舞台上演の映像に続き、その出演女優の結婚式とその後の顔末が描かれる。R・W・ファスビンダらが出演。



オトン 1969年（88分/35mm版）*Les yeux ne veulent pas en tout temps se fermer ou Peut-être qu'un jour Rome se permettra de choisir à son tour (Othón)*
撮影／ウーゴ・ピッコネ
17世紀フランス・バロック演劇の大作家ビュール＝コルネイユの埋もれた悲劇「オトン」を、現代のローマの废墟で、フランス語の不得手な素人が演じる。暴君ネロ亡き後の混迷する帝政ローマの政略劇が、泥の駆け引きを交えて語られる。



歴史の授業 1972年（85分/16mm版）*Geschichtsunterricht*
撮影／レナート・ベルタ
ブレヒトの未完の長編小説「ユリウス・カエサル氏の商売」の一部を再構成。カエサルの共和制ローマが資本主義の台頭と共に不公平を生み出す過程を、カエサルの同時代人たちが、現代のローマ市街を車で移動する現代の青年に対し証言する。



アーノルト・シェーンベルクの《映画の一場面のための伴奏音楽》入門 1972年（15分/16mm版）Einleitung zu Arnold Schoenbergs "Begleit-musik zu einer Lichtspielszene"
撮影／レナート・ベルタ
1923年に作曲家シェーンベルクが、友人の画家カンディンスキーの反ユダヤ主義的発言に対して書いた激烈な絶縁状の朗読に、シェーンベルクが架空の映画音楽として作曲した曲が重なる。1935年のブレヒトの反資本主義演説も引用される。



フォルティエニ／シナイの犬たち 1976年（83分/16mm版）*Franco Fortini/I Cani del Sinai*
撮影／レナート・ベルタ
イタリアの詩人フォルティエニが、1967年の「六月戦争」を機に執筆した政治的エッセー「シナイの犬たち」を作者自身が朗読する。ユダヤ人の父とカリックの母を持つ著者のファシズム体験と、現代における中東紛争に対する階級闘争的解釈が交錯する。



すべての革命はのろかそるかである 1977年（11分/35mm版）*Toute révolution est un coup de dés*
撮影／ウィリアム・ルプジャンスキ
ステファヌ・マラルメの革命的な詩「賽のひと振り」は決して偶然を廃棄しないであろうと、1871年のパリ・コミューンの闘士の最後の拠点となったペール・ラシェーズ墓地の芝生に座った、様々な言語を母語とする九人の男女が代わる代わる音楽的に朗読する。



雲から抵抗へ 1978年（105分/35mm版）*Dalla nube alla resistenza*
撮影／サヴェーリオ・ディアマンティ
イタリアの作家チェーザレ・パヴェーゼの未完の神話的対話篇集「レウコとの対話」の6篇「雲」「キマイラ」「盲人たち」「狼人間」「客」「火」を映画化した第一部と、パヴェーゼ最後の長編小説「月と篝火」を圧縮再構成した第二部からなる。



早すぎる、遅すぎる 1980・81年（101分/16mm版）*Trop tôt, Trop tard*
撮影／ウィリアム・ルプジャンスキ（第一部）、ロベール・アラスラキ（第二部）
風景が映し出される中、第一部ではエンゲルスのカウツキー宛て書簡に基づき、18世紀末フランス農村の貧困状況が分析され、第二部では、マルクス主義的階級史観に基づき、近現代のエジプトにおける農民蜂起の歴史が画面外で語られる。



アン・ラジャジャン 1982年（8分/35mm版）*En Rachâchant*
撮影／アンリ・アルカン
五月革命の影響下に書かれたマルグリット・デュラス唯一の童話「あゝ！エルネスト」の映画化。7歳の小学生エルネストは登校拒否宣言をし、両親と共に小学校の教室で教師と戦い続ける。だが教師は結局、エルネストを説得することができない。



アメリカ（階級関係） 1983・84年（126分/35mm版）*Klassenverhältnisse*
撮影／ウィリアム・ルプジャンスキ
カフカの未完の長編小説「失踪者」（旧題「アメリカ」）の映画化。故郷を追われ、船で単身アメリカにやってきたドイツ人青年カール・ロスマンが様々な階級関係の中で挫折と抵抗を繰り返す。主要場面はハンブルクとブレーメンで撮影された。



四部の提案 1985年（40分/デジタル）*Proposta in quattro parti*
イタリア国営放送で1985年年末の深夜に放映された四部構成の番組。D・W・グリフィスの無声短篇映画「小麦の買い占め」全篇、「モーゼとアロン」、「フォルティエニ／シナイの犬たち」、「雲から抵抗へ」各抜粋で構成。



エンペドクレスの死 1986年（132分/35mm版）*Der Tod des Empedokles oder: Wenn dann der Erde Grün von neuem euch erglänzt*
撮影／レナート・ベルタ
フリードリヒ・ヘルダーリンの1798年執筆の未完の二幕悲劇を完全映画化。古代シチリアの詩人哲学者エンペドクレスが民衆と訣別し、自ら死を選ぶまでの物語が、シチリアのラグーナとエトナ山中腹を舞台に、晦渋な詩句によって語られる。



黒い罪 1988年（40分/35mm版）*Schwarze Sünde*
撮影／ウィリアム・ルプジャンスキ
ヘルダーリンの「エンペドクレスの死」の1820年執筆の第三稿の映画化。ストロープ＝ユイレはこの第三稿は映画化不可能と考えていたが、ベルリン・シャヴィューネ劇団による舞台脚色版に不満を覚え、原作に忠実な映画化を決意した。



セザンヌ 1989年（50分/35mm版）*Cézanne*
撮影／アンリ・アルカン
詩人ジョアシャン・ガスケの著作「セザンヌ」に含まれるセザンヌの発言の朗読に重なる、セザンヌゆかりの土地やセザンヌの絵が映し出される。ジャン＝ル＝ワール監督の『ボヴァリー夫人』の抜粋と共に「エンペドクレスの死」からの二つの抜粋の挿入もある。



アンティゴネー 1991・1992年（100分/35mm版）*Die Antigone des Sophokles nach der Hölderlinschen Übertragung für die Bühne bearbeitet von Brecht 1948*
撮影／ウィリアム・ルプジャンスキ
ベルリン・シャヴィューネ劇団の委嘱による舞台演出に基づく映画。ソボクレスの悲劇「アンティゴネー」をヘルダーリンが特異な方法でドイツ語に翻訳、それを基に1948年にブレヒトが改訂した版を古代円形劇場で様式的に映画化している。



ロートリンゲン！ 1994年（21分/35mm版）*Lothringen!*
撮影／クリストフ・ボロック、エマニュエル・コリノ
国粋主義的作家モリス・バレスの長編小説「コレット・ボドシュ」の一部を用い、ストロープの生地でもある、フランス北東部ロレーヌ地方の中心都市メスの悲劇的な歴史が語られる。「ロートリンゲン」とは「ロレーヌ」のドイツ名である。



今日から明日へ 1996年（62分/35mm版）*Von heute auf morgen*
撮影／ウィリアム・ルプジャンスキ
12音技法によるシェーンベルク唯一の時事オペラを、ミシャエル・ギヤレン指揮、フランクフルト交響楽団の演奏により映画化。リブレットはシェーンベルク夫人による。倦怠期のブルジョワ夫婦のすれ違いと和解の室内劇が滑稽に描かれる。



シチリア！ 1998年（66分/35mm版）*Sicilia!*
監督／ウィリアム・ルプジャンスキ
シチリア出身の作家ヴィットリーニの長編小説「シチリアでの会話」の一部分を、序曲と六つの楽章に再構成。主人公は15年ぶりにシチリア内陸の貧しい母の家を訪ねる。彼は道中に偶然出会った人々と会話し、母に昔話を聞き、山間部の村の研ぎ屋と立ち話をする。



労働者たち、農民たち 2000年（123分/35mm版）*Ouvriers, paysans (Opérai, contadini)*
監督／レナート・ベルタ
ヴィットリーニの未完の長編小説「メッシーナの女たち」の交響的な複数の独白からなる章を映画化。イタリアで終戦直後の混乱の中、行き場を失った労働者、農民たちがある山中で共同体を作り、苦難を乗り越え、ひと冬を越した物語が、夏の潤れ谷で語られる。



放蕩息子の帰還／辱められた人々 2003年（64分/35mm版）*Il ritorno del figlio prodigo/Umiliati*
撮影／レナート・ベルタ
「労働者たち、農民たち」の挿話を再利用した『放蕩息子の帰還』と、その後日譚『辱められた人々』の二部構成。後者では、山中の共同体に地主代行や元バルチザンらが訪れ、土地所有権を侵害する違法性、自給自足経済の崩壊の悪さを説き、共同体を崩壊させる。



ルーブル美術館訪問 2004年（48分/35mm版）*Une visite au Louvre*
撮影／ウィリアム・ルプジャンスキ、レナート・ベルタ
映画「セザンヌ」に続き、ジョアシャン・ガスケの創作的回想録「セザンヌ」のガスケとの対話の一部を参照しつつ、セザンヌが見たであろうルーヴル美術館所蔵の美術作品を注視する。対話の形で語られるセザンヌの思弁的な絵画論が女性の声で画面外で語られる。



あの彼らの出会い 2006年（68分/35mm版）*Quei loro incontri*
撮影／レナート・ベルタ
パヴェーゼの神話的対話詩篇「レウコとの対話」の最後の5篇「人類」「神々」「洪水」「ムーサたち」「神々」を映画化。古代ギリシャの神々、半神半人、森の精、死すべき運命を持つ人間らの間で交わされる対話がオリュンポスに見立てた山腹で演じられる。



ヨーロッパ2005年、10月27日 2006年（12分/デジタル）*Europa 2005 - 27 octobre*
ストロープ＝ユイレが初めてDVを用いたシネトラクト。イタリア国営放送の委嘱により2006年春に撮られた。警察に追われ変電所に隠れていた15歳と17歳の移民少年が感電死したクシニ＝ス＝ボワの事故現場を撮影する。この事故が各地の暴動のきっかけとなった。



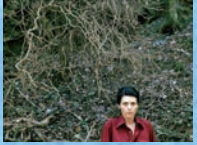
アルデミスの膝 2007年（26分/35mm版）*Il Ginocchio di Artemide*
撮影／レナート・ベルタ
「レウコとの対話」の1篇、エンデュミオンと見知らぬ者の対話「野獣」の映画化。監督主義はストロープ単独である。パヴェーゼ生誕100周年の2008年に公開予定だったが、2009年に延期された。出演は『あの彼らの出会い』のダリオ・マルコンチャーニとアンドレア・パッチ。



ジャン・ブリカールの道程 2008年（40分/35mm版）*Itinéraire de Jean Bricard*
撮影／ウィリアム・ルプジャンスキ
ジャン・ブリカールは1932年にロワール河近辺で生まれ、その地域で暮らし、92年に引退するまでヴェルトル島の砂質採取事業の責任者だった。ドイツ占領期などの過去を振り返る彼の談話は、1994年2月24日に社会学者ジャン＝イヴ・チーが録音したものである。



魔女＝女だけで 2009年（21分/35mm版）*Le streghe, femmes entre elles*
撮影／レナート・ベルタ
「レウコとの対話」の1篇、魔女キルゲーと女神レウコテアーの対話「魔女」の映画化。仏語題「女だけで」は同じパヴェーゼ原作のナンティエーニ『女ともだち』（1955）の仏語題。ジョヴァンナ・ダッディ、ジョヴァネッラ・ジュリアーニ出演。



ジョアシャン・ガッティ 2009年（2分/デジタル）*Joachim Gatti*
2009年7月8日、34歳の活動家、映画作家ジョアシャン・ガッティはモントリイウでデモ活動中、警官にフラッシュボールのゴム弾で撃たれ、片目が破裂し、視力を失った。本作では、事故以前の彼の写真にルソーのアクスタがかぶさる。



コルネイユ＝ブレヒト 2009年（80分/デジタル）*Cornellie – Brecht*
撮影／クリストフ・クラヴェール
副題「ローマ、私が恨む唯一のもの」。コルネリア・ガイザーがコルネユの「オラース」第4幕第5場と「オトン」の短い一節を読む。その後、ブレヒトのジョア劇「ルクスの審問」が読まれる。編集の異なる3ヴァージョン上映。



おお至高の光 2009年（18分/デジタル）*O somma luce*
撮影／レナート・ベルタ
ダンテ「神曲」天国篇・最終第33歌、第67節「おお至高の光」から最後までを、ジョルジョ・パッセローネが朗読する。冒頭の黒味にシェルヒェン指揮、エドガー＝ヴァレーズ「砂漠」初演ライブ演奏（1954）が流れる。



ある相続人 2011年（22分/デジタル）*Un Héritier*
撮影／レナート・ベルタ、クリストフ・クラヴェール
バレスの「東方の砦」三部作の第一作「ドイツに仕えて」の抜粋に基づき、アルザス守護聖人の修道院がある聖オディル山でデジタル撮影。ストロープ自らロレーヌ人に扮し、ジョゼフ・ロトネール扮するアルザス人青年と対話する。



ジャッカルとアラブ人 2011年（11分/デジタル）*Schakale und Araber*
撮影／クリストフ・クラヴェール
フランツ・カフカの寓話短編の映画化。音楽は、ジョルジュ・クルタージュ「カフカ断章」作品24（1986）第四部第39曲「またもや、またもや」。出演は、バルバラ・ウルリヒとジョルジョ・パッセローニ。ストロープが声のみ出演。



慰めようのない者 2011年（15分/デジタル）*L'inconsolable*
撮影／レナート・ベルタ、クリストフ・クラヴェール
「レウコとの対話」の一篇の映画化。吟遊詩人オルベウスを八つ裂きにする運命にあるバックー（酷訂する狂暴なドラッキアの女）の一人にジョヴァンナ・ダッディ、最愛の妻エウリュディケーを亡くしたオルベウスにアンドレア・パッチ。



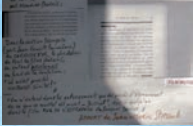
母 2012年（20分/デジタル）*La madre*
撮影／クリストフ・クラヴェール
「レウコとの対話」の一篇に基づく。女狩人アタランテーを含む勇士らと猪狩りに参加した、王の息子メレアグロスは、母親アルターアーの呪いで殺された。ヘルメースにジョヴァンナ・ダッディ、メレアグロスにダリオ・マルコンチャーニ。



ミッシェル・ド・モンテーニュのある話 2013年（33分/デジタル）*Un Conte de Michel de Montaigne*
撮影／クリストフ・クラヴェール
モンテーニュ学者アルマンゴーにより1934年にパリに寄贈され、ソルボンヌ大学北のボール＝パンルヴェ小公園にあるボール＝ランドフスキ作のモンテーニュの坐像の近くで、「エッセー」第2巻第6章「実習について」がバルバラ・ウルリヒにより朗読される。



ヴェネツィアの死（『ヴェネツィア70：リロードされた未来』の1篇） 2013年（2分/デジタル）*La Mort de venice (Venice 70 – Future Reloaded)*
ヴェネツィア国際映画祭の第70回目を記念する連作動画『ヴェネツィア70：リロードされた未来』の一篇。バレスの旅行記『ヴェネツィアの死』第3章「アドリア海の水平線上に漂う影たち」の真の一部とメモが映し出される。



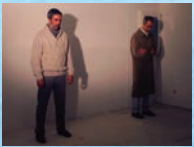
影たちの対話 2014年（28分/デジタル）*Dialogue d'ombres*
撮影／レナート・ベルタ
ストロープ＝ユイレが1954年に映画化を構想したという、ベルナノスの1928年の同名小説に基づく。一組の男女あるいは彼らの影が木陰で対話する。パリで稽古された後、ノルマンディのフレール近郊で撮影された。フランクソワーズ役はコルネリア・ガイザー、ジャック役はベルトラン・ブルデールが演じる。



ヴェネツィアについて（歴史の授業） 2014年（24分/デジタル）*À propos de Venise*
撮影／クリストフ・クラヴェール
河岸の木と枝の長廻し2ショットに重ね、バレスの旅行記『ヴェネツィアの死』第3章「アドリア海の水平線上に漂う影たち」の一節が読まれる。ナボレオン、ゲーテ、シャトブリアンの歴史的記憶。最後に『アンナ・マグダレーナ・バッハの日記』（1968）よりカンタータ BWV205のARIAが演奏される。



共産主義者たち 2014年（70分/デジタル）*Kommunisten*
撮影／クリストフ・クラヴェール
2014年スイスのローレでCannon5Dで撮り下ろした、マルローの同名小説（1935）に基づく「偽魔の時代」に、ストロープ＝ユイレの旧作5本「労働者たち、農民たち」「フォルティエニ／シナイの犬たち」「早すぎる、遅すぎる」「エンペドクレスの死」「黒い罪」からの抜粋を加えた6部構成の作品。



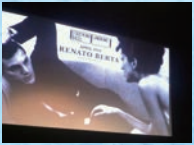
アルジェリア戦争！ 2014年（2分/デジタル）*La guerre d'Algérie*
撮影／クリストフ・クラヴェール
精神科医ジャン＝サントレットの2014年の談話に基づくひとつの情景を再現した短篇。初対面の精神科医に拳銃を向ける、精神を病んだ男は、アルジェリア戦争で現地人の村を焼き払うよう命じた上官の中尉を殺したと語る。医師はその後25年かけて彼の心的外傷後ストレス障害を治療した。



水槽と国民 2015年（31分/デジタル）*L'aquarium et la nation"*
撮影／クリストフ・クラヴェール
パリの東洋料理店の金魚の水槽の映像に続き、精神分析家エメ・アグネルがマルローの小説「アルテンブルクのクルム」の第二部の一篇を読み上げ、最後にルノワールの映画『ラ・マルセイエーズ』の抜粋が引用される。



レナートに 2015年（8分/デジタル）*Pour Renato*
編集／クリストフ・クラヴェール
2015年4月1日、スイスのシュタートキノ・バーゼルで撮影監督レナート・ベルタの70歳の誕生日を祝うために作られた。ベルタがウーゴ・ピッコネと共に共同で撮影監督を手がけた『オトン』の抜粋と撮影現場の写真で構成。



目下の進捗状況は？ ジャン＝マリー・ストロープ 2016年（9分/デジタル）*"Où en êtes-vous Jean-Marie Straub?"*
2014年9月以後、ボンビッドゥ・センターが企画に関連する映画作家に発注している動画コレクション「目下の進捗状況は？」の1本として、ストロープとユイレの全作品上映に際し、ストロープが自宅で猫たちを撮った動画。



湖のんびと 2020年（19分/デジタル）*Gens du lac*
撮影／レナート・ベルタ
スイスのレマン湖。ひとりの男が、同地出身のジャンヌ・マサールの小説『湖のんびと』（2013）より、1942年に対岸フランスの対独抵抗運動に協力し、1944年に社会党の地元支部を結成した、同地の漁師の軌跡を朗読する。



ロボットに対抗するフランス 2020年（10分/デジタル）*La France contre les robots*
撮影／レナート・ベルタ、バトリック・レツシュ
科学技術で人民を統制する英・米・ソ連それぞれの帝国主義を批判し、自由を尊重するフランスを擁護したジョルジュ・ベルナノスの1945年の政治煽動文の一節を湖畔を歩く男が暗誦。各国が感染症対策を強化する2020年4月5日にネット上で公開された。

